

保育方針を伝えるための手がかりとして
～「ガンピーさんのふなあそび」を通して～

港北幼稚園やゆうゆうのもり幼保園の入園に際して、保育方針を伝えるために、入園を希望する保護者の方に、長年、紹介させていただいてきた絵本を取り上げます。

ストーリーはこれだけです。この単純なお話が、何で港北幼稚園やゆうゆうのもり幼保園の保育を説明していることになるのかおわかりになりますか？

養成校の学生には

以下のような質問しています

- 1 子ども達がこの絵本を読んだときに、どこが面白いと感じると思いますか？
- 2 ガンピーさんを保育者、子どもや動物たちを、園児と考えた場合、ガンピーさんのかかわりをどう思いますか？（肯定的にみますか、否定的にみますか）
- 3 舟がひっくりかえったときに、ほとんどの大人（保育者や親）が言う言葉を、ガンピーさんは言いません。どんな言葉でしょうか？

本のストーリーはとても単純です。川のそばに住んでいるガンピーさんは、舟（手漕ぎのボートのような船です）を一艘もっています。そこに、子どもたちやさまざまな動物たちが舟に乗りに来ます。ガンピーさんは、舟に乗りに来た子ども達や動物たちを、次から次へと乗せてあげます。ただし、ガンピーさんは舟に乗るには、子どもたちには「けんかをしなければ」とか、うさぎに「とんだりはねたりしないように」といったり、にわとりには「はねをパタパタやるんじゃないよ」など、舟に乗るために守ってほしいことを、子どもたちや登場する動物たちに伝えます。

物語



『ガンピーさんのふなあそび』
ジョン・バーニンガム作
みつよしなつや訳 ほるぶ出版

絵本を通して保育の中で大切にしたいこと

ガンピーさんがすごくこわい保育者であれば、子どもや動物たちは、言われたことを守り、大騒ぎすることもなく、舟はひっくりかえらず、目的地に着いたかもしれません。ところが、ガンピーさんは、保育目標として、子どもや動物たちに育ってもらいたい姿を、乗船するときに言っているのです。

子どもはけんかをするもんだよ、にわとりは羽根をパタパタするからにわとりなのです。それぞれの子どもや動物らしさを受け入れた上で、一緒に生活する中で、お互いにどのようにかわればいいのかを覚えていってもらえればよいと思っていたのではないかと思います。

舟が自分たちのせいでひっくり返ったことを経験した子どもたちや動物たちは、次に舟に乗るとき、自分たちでどうしたらいいかを考えたり、話し合ったりできるようになっていくはずです。大人が先回りして指示してばかりでは、指示がなければ動けない子どもになってしまいます。

子ども自身が主体性を発揮して、状況に応じて、どうしたらよいかを考えられるようになることが大事なのです。このような力は、実際に遊びや生活の中で経験していくことで身に付いていきます。そのような保育を大事にしているのが、港北幼稚園やゆうゆうのもり幼保園の保育です。